



本格的な能舞台の上で繰り広げられる熱気に満ちた授業は、キャンパスの中にいることを忘れてしまうほどだ

藝大の教員たちが、日々の研究やレッスンに勤しむ「研究室」のなかはどうなっているのだろうか？ なかなか見る機会のない部屋を潜入ルポする。

音楽学部邦楽科 能楽専攻 関根知孝教授

Department of Traditional Japanese Music, Nob Course
Professor SEKINE Tomotaka

研究室探訪

第三回

Visiting the Laboratory

上野キャンパス、音楽学部練習ホール館二階の一室の重い扉を開けると、そこには思わず目を見張る光景が現れる。近代的な建物の中に、清々しくも荘重な能舞台が設けられているのだ。舞台真正面の鏡板には老松が、その右手の板には若竹が描かれ、左手からは橋掛りが延びる。あくまでも稽古用の舞台とはいえ、ここが大学構内であることに誰もが驚くことだろう。

東京藝大における邦楽教育は、一八七九(明治十二年、当時の文部省内に設置された音楽取調掛にまでさかのぼる歴史をもつ。藝大の前身である東京音楽学校を経て、一九三六(昭和十一年)年に邦楽科が誕生(能楽・箏曲・長唄)。戦後、新制大学に移行し、音楽学部が発足してからも、日本の芸術系大学で唯一の邦楽科として伝統音楽の教育研究に取り組んでいる。能楽の四座一流(観世・金春・宝生・金剛・喜多)の中で、藝大では観世流と宝生流の専攻があり、それぞれの教員が指導にあたっている。今回取材した観世流シテ方の関根知孝教授は藝大邦楽科の卒業生でもある。関根教授によれば、能楽とはまず演者が「三問四方の舞台」というキャンパスの中の空気を、曲の趣に染めていくのが基本だという。

この日は、普段着物・袴姿の仕舞で「春日龍神」と「屋島」、能装束をまとった「猩々(しょうじゅう)」の授業風景を見ることができた。関根教授は見台に向かい、張扇で拍子をとりにながら学生に稽古をつける。そして、拍子をとる手をたびたび休め、自身が舞台にあまり形を見せるのだ。「能楽はなによりも重心が大事です。肩、腰、股関節



を意識しながら、しかも形を崩さず、無駄な力を抜いて舞うことが必要です」。体の軸のとり方、腹のすえ方、足の運び方など自ら手本を示すとともに、ときには厳しく、ときにはユニークな比喻を交えながら学生を導いていく。

「謡のリズム、声音、筋の理解が重要であることはいうまでもありません。きれいに舞うのがうまいだけでは形にならないことを肌で感じてもらいたいですね」。

現在、能楽専攻の在校生の約六割は能楽師の家庭で育ち、残りの四割は一般の家庭の出身だという。小野里泰輝さん(学部三年生)は、父親が能楽師で藝大邦楽科の卒業生でもある。六歳から父親や別の能楽師にも学んでいるが、関根教授の指導はより細かく具体的なのだそうだ。「例え話がおもしろいですし、どのレベルの学生にも分け隔てなく、根気よく稽古をつけてくださっています」。馬場加奈子さん(学部一年生)は、他大学でアートマネジメントを学び、日本の伝統芸能・音楽のルーツを探る中で能楽と出合った。「関根先生の指導はわかりやすいですし、生活や自然界の全てに目配りをされていると感じます」。

能楽は武士の平常時の習練としても奨励されたほどのもので、精神的にも肉体的にも厳しさが要求される。「目に映る、心に浮かぶものを、芸に取り入れること」は関根教授にとつての師匠家にあたる宗家、先々代二十四世観世左近の言葉。「行住坐臥」の言葉のとおり、能楽は普段の立ち居振る舞いがそのまま舞台に出てくるというが、その奥深い世界の一端が垣間見える授業風景だった。